

たかみせんせき

鷹見泉石

日本最初のオランダ地図を制作した蘭学者 古河市



(古河歴史博物館蔵)

天明5年(1785) - 安政5年(1858)。古河の生まれ。古河藩士鷹見忠徳の長男忠常として生まれ、隠居後、泉石と名乗る。ヤン・ヘンドリック・ダブルというオランダ名も使った。幼少の時、江戸に移り藩主土井利厚・利位に仕え、その後家老となり大塩平八郎の探索でも功をあげた。蘭学については、生涯熱意を傾け、オランダ語の習得をはじめ、数か国語に関心を向ける。天文学・地理学にも詳しく、広範囲にわたり西洋の文物を収集する。長年の研究成果を『新訳和蘭国全図』にまとめ、鎖国下における日本人に国際感覚の必要性を促す。また約80冊におよぶ『鷹見泉石日記』は、同時代の政治史、対外関係史、文化史などの面で貴重な資料として残る。

鷹見泉石は、古河藩士の長男として、古河の城下で生まれました。12歳の時に父とともに江戸〔東京〕の藩邸に移り、翌年、藩主の土井利厚に仕えました。日本と通商を求めるロシア船が来るなど、大変難しい時に老中となっていた利厚の側にいた泉石は、早くから海外の情報の重要性に注目するようになりました。

(外国では大型の船が作られ、どこへでも行くことができるようになり、国と国とがつき合いをはじめた今の時代、日本だけが鎖国<外国と人の行き来や貿易などを厳しく制限すること。>をしていることはもうできないだろう。もっと外国の学問を学ぶことにしよう。)

父の死により、23歳で家督を継ぎましたが、学問への情熱は衰えず、当時、日本を代表する蘭学者であった大槻玄沢が主催する新年会〔オランダ正月〕に出席したり、ロシア漂流民の大黒屋光太夫に会ってロシアのことについて研究をしたりしました。その後、利厚が亡くなると、新しい藩主の土井利位にも仕えます。利位は藩主になると、雪の観察研究を始め、後に『雪華図説』という書物にまとめますが、泉石の影響が大きかったといわれています。

46歳の時に古河藩の家老になり、忙しい毎日を送ることになりますが、その2年後、利位が大坂城代となったため、藩主とともに大坂へ行きます。そこで、自分の研究活動よりも幕府の政治を担っている藩主のために、海外の情報をたくさん集めるように努めました。現在、国宝に指定されている「鷹見泉石像」を描いた渡辺崋山との交流が始まったのもこのころでした。

天保8年(1837)、大坂で驚くような事件が発生しました。幕府の役人であった大塩平八郎が、貧しい人々を救うために乱を起こしたのです。



「新訳和蘭国全図」(古河歴史博物館蔵)

乱はすぐにおさまりましたが、平八郎の行方は、その後しばらくわかりませんでした。泉石は利位の片腕として、平八郎の探索と捕縛に力を尽くしました。

事件の決着により、利位は幕府の老中へと昇進することになりました。泉石はますます多忙になりましたが、(この機会を利用して、さらにたくさんの人との交流を深めよう。)と考え、幕府の天文方役人やオランダ通詞、あるいは他藩の蘭学者など多くの人たちと交流を深めるように努めました。また、国内外の地図や絵図の入手にもたいへん熱心でした。海外に行くことができなかった鎖国の時代に、地図は相手の国のことをもっともよく教えてくれる情報であったからです。

弘化3年(1846)、泉石は家老をやめることになり、古河の屋敷に隠居します。忙しかった家老の仕事をはなれた泉石は、若い頃に抱いていた気持ちを思い出します。(鎖国以来、日本にきている唯一の西洋国はオランダである。しかし、日本では、そのオランダの地理や歴史、文化などについてほとんど知られていない。今こそ研究してきた成果を日本に広めよう。)

嘉永3年(1850)、日蘭交流250年という記念の年に、広く開かれた日本の将来を思い描き、今までの研究成果を著した「新訳和蘭国全図」を完成させます。65歳の時でした。これは我が国最初のオランダ地図です。

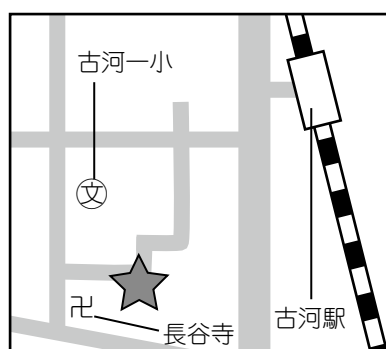
こうして、古河藩の家老であり、蘭学者として名を上げた泉石は、安政5年(1858)、近代の夜明けを間近に感じながら、この世を去りました。

ゆがりのスポットに行ってみよう

鷹見泉石記念館(古河歴史博物館別館)

所在地 古河市中央町3-10-15

内容 この記念館は、鷹見泉石が隠居後最晩年を送った家を記念館としたものです。平成2年(1990)に開館されました。



おもな 参考文献

『郷土の先人に学ぶ』(茨城県教育委員会・1986)

『鷹見泉石展—国宝のモデルが集めた文物』(古河歴史博物館・2004)